

学生による材料フォーラム

—研究意欲に対する刺激として—

福森 淳三

(豊橋技術科学大学大学院)

みなさん「学生による材料フォーラム」というのをご存知でしょうか。これは、東海地区の各大学の大学院、学部学生および高専の学生による先端的な材料研究に関するポスターセッションと討論を行う企画です。

この企画は、東海地区の企業の方々に教育現場を理解して頂くこと、および学生の研究に対する意欲を高揚させることを目的として、日本鉄鋼協会および日本金属学会の東海支部が主催しているものです。平成3年にスタートし、昨年で第3回目となりました。

第1回目は名古屋工業大学で行われ、6大学・1高専の13学科から研究成果が発表されました。第2回目は名古屋大学で行われ、5大学・1高専の13学科の参加により、1回目と同様のポスターセッションが行われました。また、これらのテーマの内容が材料の広い範囲にわたっていることから、このフォーラムに参加することにより、自分自身の目や耳で先端的な材料研究を体験できます。これは、私たち学生にとって非常に有意義なことです。そして第3回目のフォーラムは昨年、豊橋技術科学大学で行われ、5大学・1高専の10の学科の発表と、新たに維持会員による企業紹介コーナーが設置され、6つの企業の参加が実現しました。企業が参加することによって、産業界と大学との情報交流に一層の活性化が図られ、学生に与える影響は益々大きくなったと思います。

また、今回のフォーラムは豊橋で行われたこともありまして私たちの研究室からも2つのテーマを発表し、私自身もそれに参加しました。現在、私は「金属クロムの延性改善」というテーマで研究を行っており、今回のフォーラムではこの研究結果を報告しました。金属クロムは様々な優れた性質を持っていますが、まだまだ数多くの改善されるべき点があります。その一つが延性であり、これまでの研究で随分と新しいことがわかりました。金属クロムは興味深いことに、純金属であるにも関わらずセラミックスのような挙動を示します。このような金属は私の知る限り初めてであり、私自身この金属について研究することは、とても夢のあることだと思います。

本研究内容は、以前学会で発表しましたが、この「学生による材料フォーラム」では、学会とは全く違った雰囲気がありました。それは学生同士の討論が中心ということで、積極的に見たり、聞いたりし、質問も容易に出来るということです。また、多くの先生方も参加されていますのでアドバイスを受けることが出来ます。これは私たち学生にとって、これから研究を進めていく上で大きな糧となるに間違いありません。その上、このフォーラムには材料分野の様々な学科、研究室から発表がなされていましたので、自分の知らない分野に遭遇し、知識を広げる良い機会でありました。また、ポスターセッションの後には懇親会が設けられており、気軽に話し合える場所が準備され一層なじみやすいフォーラムになっているといえます。

私たち学生にとって、このような刺激は、知識欲をかきたて、研究意欲を高揚させる上で非常に大切なことだと思います。これからもこの企画が学生に刺激を与えてくれる機会となることを強く期待します。



全国大会の裏話

井口 義章

(名古屋工業大学工学部)

日本鉄鋼協会の1993年秋季講演大会が金属学会と合同で名古屋工業大学で開催された。両学協会合同の講演大会が本学で開かれるのは初めてであった。日本鉄鋼協会の会場係を担当しての裏話を書かせて頂く。

名古屋工業大学は名古屋市の都心に位置し、JRと地下鉄の駅から歩いて10分もかからない交通至便の場所に在り、さらに鶴舞公園という都市公園に隣接しており全国からの参加者に喜んで頂ける自信はあったのだが、いざ開催してみると以下に話をするような苦労があった。

両学協会でもトータル46会場（1会場は重複）を一ヶ所で用意するのはぼつぼつ限界に来ているという意見が多いが、我々が一番苦労したのは本学が2部（夜間部）を持っており、講演大会の前日午後9時まで一部の教室で前期の期末テストが行われていたことであった。掃除・机の並べ替えを終えたのは午後10時過ぎであった。しかし、アルバイトの学生諸君がよく頑張ってくれた御陰で予定通り会場の設営ができた。学生さんに感謝感謝。ところで、日本鉄鋼協会分の19会場を設営した御陰で、自分の大学の教室の状態がよく把握できた。日頃の掃除が不十分なこと、最近の学生のマナーの悪さのためか予想以上に汚れていること、などである。それにしても、教室にスペース・雰

囲気ともにもっとゆとりが欲しいものだ。

もう一つはマイクの混線である。日本鉄鋼協会の3日間の講演大会で6つの討論会が持たれたが、それらの会場には2本ずつのマイクが必要であった。数ヶ所の会場で携帯用のマイクを協会本部から借りたが、既設のマイクと携帯用マイクの間で電波の周波数が一致して、会場によっては他会場の音声が入って来たりしたため、質問時以外はスイッチを切って急場を凌いだ。このトラブルは大会初日の午後になってようやく解決した。それにしても、企業から応援に駆けつけて頂いた人達も含めて会場係が目に見えない電波を相手に奔走する羽目になるとは予想もしていなかった。これは今後の参考になるかもしれない。

本学のように初めての開催、そうでなくても7年に一度の支部での開催となるとどうしても張り切り過ぎて過剰なサービスまで準備しがちであるが、今後のことも考えると簡素でスマートな大会が望まれる。今回もホテルの予約を両学協会を窓口にして行ったが、利用者が大変少なかった。これなどもなくともよかったのではなからうか。

大会最終日、備品類の撤去が終わって日本鉄鋼協会本部からの物品を納めたコンテナを送り出し、協会本部の方々に御別れの挨拶をしてほっとしたものである。まあ、準備・運営を含めて大変ではあったが、日本鉄鋼協会・日本金属学会で活動しておられる皆様方に自分の大学に来て頂いたのは、心のどこかで嬉しいものである。